

第12回 千里文化センターフォーラム

# 支え合いの未来を紡ぐ

～ 共に歩む あたたかいまち千里 ～

主 催 : 吹田市・豊中市千里ニュータウン連絡会議  
豊中市 市民協働部 千里地域連携センター

協 力 : 吹田市立市民公益活動センター「ラコルタ」  
豊中市立 千 里 図 書 館

## ＝ 第12回 千里文化センターフォーラム 実施要項 ＝

日 時 : 平成29年(2017年)3月11日(土) 14:00～16:00  
場 所 : 豊中市千里文化センター「コラボ」2階 多目的スペース  
テ ー マ : 支え合いの未来を紡ぐ ～ 共に歩む あたたかいまち千里 ～  
参 加 者 : 73人

**基調講演** 「多世代・多分野・多文化の共生ではぐくむ“共育”コミュニティ  
～ であい・ふれあい・ささえあいの“なぎさ”を紡ぐ ～」

あらさき くにひろ  
新崎 国広 先生

(大阪教育大学 教育学部 教養学科 人間科学講座  
発達人間福祉学 准教授)

### パネルディスカッション

“人と人とのつながりで支え合うあたたかいまち”としての千里地域の  
魅力、多様な市民公益活動が拓く“誰もが住みやすい安心と共生のま  
ち”千里の未来について、千里地域で活動中のボランティアメンバー  
をパネリストに迎え、会場全体の意見交換を交えて考える。

パネリスト: はまさき さだや  
濱崎 定也さん

(豊中市千里文化センター市民実行委員会 副実行委員長)

いすみ しょう  
泉 翔さん

(元ひきこもり当事者団体「NPO法人ウィークタイ」代表理事)

はせがわ みつよ  
長谷川 美津代さん

(「NPO法人市民ネットすいた」理事長)

しみず しんいちろう  
清水 慎一郎さん

(ファミリーマート吹田栄通り商店会店オーナー)

コーディネーター: かみむら ゆり  
上村 有里さん

(「NPO法人とよなかESDネットワーク」理事長、  
豊中市社会教育委員)

コメンテーター: あらさき くにひろ  
新崎 国広先生

(大阪教育大学 教育学部 教養学科 人間科学講座  
発達人間福祉学 准教授)

**開 会 司会：豊中市 都市計画推進部 千里ニュータウン再生推進課 坪井さん  
挨拶：豊中市 市民協働部 千里地域連携センター 田中センター長)**

<p>司会</p>	<p>お待たせいたしました。ただいまから第12回千里文化フォーラム「支え合いの未来を紡ぐ～共に歩む あたたかいまち千里～」を開催いたします。</p> <p>本日の司会進行を担当させていただきます、吹田市と豊中市の共同で設置しております吹田市・豊中市千里ニュータウン連絡会議の坪井と申します。</p> <p>よろしくお願いいたします。</p> <p>講演に入ります前に、お手元の資料の確認をさせていただきます。</p> <p>「クリーム色のフォーラムのチラシ」、  「新崎先生の基調講演パワーポイント資料」、  「栄えるカフェのパワーポイント資料」、  「ウイークタイの活動紹介資料」、  「緑色の3つ折りのコラボ新聞」、  「アンケート用紙」、 「関連図書の一覧表」、  最後に、「水色のコラボからのお知らせチラシ」  以上 8点、お手元にお揃いでしょうか。</p> <p>開演に先立ち、注意事項をご案内いたします。会場内での写真撮影、録画、録音はご遠慮ください。また、携帯電話等の電源はお切りいただくか、マナーモードでのご対応をお願いします。記録作成の都合上、事務局側で会場後方から写真撮影をさせていただきますので、皆様のご協力を宜しくお願いいたします。</p> <p>それでは、千里文化センターフォーラムの開催に際しまして、主催者を代表いたしまして千里地域連携センター長 田中よりごあいさつを申し上げます。</p>
<p>豊中市 田中 センター長</p>	<p>みなさん、こんにちは。ようこそ千里文化センター「コラボ」にお越しくださいました。今日は、第12回千里文化センターフォーラムに多数のご参加をいただきまして、誠にありがとうございます。</p> <p>私は司会者から紹介のありました、豊中市千里地域連携センターの田中でございます。主催者を代表いたしまして、ごあいさつ申し上げます。</p> <p>吹田市と豊中市にまたがる千里ニュータウンは、日本で初めての大規模ニュータウンとして、既にまち開きから50年余りが経ちました。この千里地域も時代の流れの中、少子高齢化や地域コミュニティの希薄化、さまざまな世代での社会的孤立などといった課題が生じており、その解決に向けた取組みが必要とされています。</p> <p>本日のフォーラムは、「誰もが住みやすいまち千里の未来を築く」ため、さまざまな人々が、さまざまなカタチで交流し、お互いに支え合う、そんなあたたかなコミュニティの構築をめざすための方策を、みなさんと一緒に考えていこうとするものです。</p>

まずはじめに、基調講演として大阪教育大学の新崎先生にご講演いただきます。新崎先生は、豊中市の行政、とりわけ地域福祉の分野におきまして大変お世話になっておりまして、これまでも人と人とのつながりをテーマにご講演をいただいておりますが、先生の実践的な視点に基づく分かりやすいお話は、毎回ご好評をいただいております。

その後、基調講演を受けまして、とよなかESDネットワークの上村さんのコーディネートで、会場参加型のパネルディスカッションを行います。吹田市と豊中市でのパネリストのみなさんの活動に触れていただき、まちづくりに向けての可能性を探り、さらに深めていただければと考えております。

私たち、豊中市域のソフト事業を担当しております千里地域連携センターと共に、本日のフォーラムを主催しております、吹田市・豊中市千里ニュータウン連絡会議は、吹田市と豊中市の都市計画のハード事業担当部局が、千里ニュータウンの再生に向け、それぞれの行政区域を越えて、千里ニュータウンに関する情報交換や両市間の調整を行い、協働してまちづくりに向けた事業を展開しております。

今回、ソフト面とハード面、また吹田市と豊中市とのコラボレーションにより、まさにここ千里文化センター「コラボ」で、フォーラムの開催をさせていただいております。

このフォーラムを通じて、「人と人とのつながりで支え合う、あたたかいまち」を千里地域がめざしていけますよう、また、この催しが心をつなぐ出逢いの場となり、これからみなさんがまちづくりの主体として地域活動への積極的な参加をしていただく機縁となることを願っております。

本日は最後まで、どうぞ宜しくお願いいたします。

司会

ありがとうございました。それでは、基調講演といたしまして「支え合いの未来を紡ぐ～共に歩む あたたかいまち千里～」と題し、大阪教育大学 准教授の新崎国広先生にお話しいただきたいと思っております。

それでは新崎先生、宜しくお願いいたします。



## 基調講演：新崎国広 先生

新崎先生

こんにちは。ただ今、ご紹介いただきました大阪教育大学の新崎と申します。どうぞ宜しくお願いします。今から皆さんと一緒に、共に生きる、共に育むコミュニティづくりということで、お話しさせていただこうと思います。

少しだけ、自己紹介をさせてください。私は今、大阪教育大学で教員をしています。ただ、教員になったのは今から18年前、44歳の時に大学の教員になりました。それまで何をしていたかという、肢体不自由児施設でソーシャルワーカーをしていました。障害がある子どもたちの施設で、一緒にお風呂やお着替えのお手伝いをしたり、食事を共にしたり、こうした介助の仕事をして21年間させていただきました。それから相談援助、障害のある子どもたちや保護者の方に寄り添いながら、障害があっても一緒に生きていこう…というような仕事もしていました。大学を卒業してから21年間、私はこうしたソーシャルワーカーとしての仕事をしてきました。



当時、障害がある子どもたちが地域で生きていくというときに、二通りの生き方が待っていました。障害がある子どもたち、高齢で介護が必要な人たち、貧困等の状態にある子どもたちひとり親家庭の子どもたち…地域にはいろんな課題を抱えた様々な人たちが暮ら

しています。今日お集まりの皆さんのように、こうした人たちもみんな地域の仲間として一緒に生きていこう…という温かいまなざしをもった市民の方々、住民の方々が住んでおられる地域に退所していった子どもたちは、今40～50歳くらいになっていますが、本当に元気になって、障害を持ちながら障害者自立支援センター等で活躍しています。

一方で同じように、「地域で頑張って生きるね…」と言って、施設から退所していった子どもたちが「障害児や」「あの人、認知症だから火事でも出されたら困るよね」「あんな人、早く病院に行ったらいいのに」…というような排除したり無視したりする地域に退所していった場合、せっかく元気になったのに、また心を病んで施設に戻ってきたり、入退院を繰り返したり…というケースも沢山見てきました。

いきなり暗い話で申し訳ありません。何がお伝えしたいかという、そういった意味で今日のお話は、地域福祉を考えるときに行政や専門家によるしっかりと支援が必要な部分と、地域の方々の温かいまなざし、この二つがうまくいっ

た場合に、本日のフォーラムのタイトルにあるような「支え合いの未来を紡ぐ～共に歩む あたたかいまち」づくりができるのではないか…と思っています。

今日は皆さんにいろいろと学んでいただけたと思いますので、是非沢山のことを覚えて帰ってください。私は障害児の施設のワーカーでしたので、手話も少しできます。まず「覚える」という手話を覚えて帰ってください。と一緒に少し体を動かしましょう。外の知識を頭に入れるから「覚える」という手話は、こうなります。(手話実演) では、今度は「忘れる」という手話を一緒に考えてみましょう。(手話実演) 覚えたことはすぐ忘れる…そうならないために、覚えたことを「わかる」ということが大切です。では「わかる」という手話、一緒にやってみましょう。皆さん、胸に手を当ててみてください。胸に当てた手を上げ…てしまうと「二日酔い」になってしまいますから、(会場一同笑) 胸に当てた手を下げてください。(手話実演) これは「腑に落ちる」ということです。今日の私の話は前座です。この後、地域で様々な実践をされているパネリストの皆さんのお話を一緒に聞いていただいて、共に生きるってこういうことなんだ…ということをおわかっていただけたら、皆さんもお元気になっていただけたと思います。

今日のテーマ「共に歩む」、「ボランティア」という手話も今日、覚えて帰ってください。皆さん、片手の2本の指でチョキを出していただいてその手を下に向けて、2本の指を互い違いに動かしていただいでいいでしょうか。(手話実演) これは「歩く」という意味です。では「ボランティア」という手話をやってみましょう。チョキを二つ出してみてください。この両手の「歩く」という動きをそれぞれ離れたところからくっつけて、一緒に歩いていってみましょう。(手話実演) これが「ボランティア」という手話で、私が一番好きな手話です。

つまり「ボランティア」って一緒に歩いていこう…という人のことです。障害のある人、子どもたち、高齢者、いろんな人たちが共に、一緒に歩いていこうと思える人たち、そういった人たちが地域にいっぱいいるほど、元気になれるな…と今、実感しています。



今、絆の大切さが再確認されています。つらいお話になりますが6年前、東日本大震災が起こり、大変多くの方の尊い命が失われ、まだ行方がわからず見つからないという方も沢山おられます。豊中は1995年、阪神淡路大震災で大阪府内で最も被災された地域だったと思います。私もその当時、勤務先が日本赤十字社の施設だったので、被災者の方の救急車の付き添いをしたり、豊中市の仮設住宅の見守り等させていただきました。

絆の大切さが再確認されている今、しかし、災害があった時だけ絆が大事というのではなくて、何もない普段の時である今だからこそ、絆を大切に考えていかななくてはならないのでは、と考えています。つらいお話ですが、孤立死、セルフネグレクトの問題があります。セルフとは自分自身、ネグレクトとは拒否されている、ということですが、たとえば皆さんが地域で孤立されている方々に「ちょっと地域のサロンに行ってみよう」「一緒にお散歩しよう」等お声掛けしても「ほっといて!」「何の権利があつて干渉するの?」といった反応が返ってくることもあるかと思ひます。

でも、そういった方々は、実は決して拒否をされているということだけではなくて、いろんな思いをもって周囲からの助けを遠慮されている方々、たとえば、ご自身の大切な子どもさんやお連れ合い等を亡くされて、悲しくてどうしようもなく自暴自棄になっておられる方々、いろんな悲しみの中で孤立してしまっている方々が、セルフネグレクトという言葉に巻き込まれてしまっています。また「ひきこもり」というテーマもあります。ここではそのお話はしませんが、後ほどパネリストの泉さんに、しっかりとお話をさせていただこうと思ひます。

平成27年、2万4千人…これは何の数字かということ、大切な大切なご自身の命を絶ってしまう方が年間で2万4千人もいらっしゃるということです。2011年には3万人を超えていましたが、数年間努力をして6千人、減らすことができました。ただ、つらいのは若い方々、小学生の子どもから39歳の青年までの若者の死亡原因一位が自殺であるという事実があります。また、児童虐待が27年前に比べて百倍になったという事実、そして子どもの貧困ということがあります。いま豊中市で子どもの貧困ということはどう考えていくか、という委員会のお世話役もさせていただいています。

障害者に対する偏見、無理解ということも広がってきているのかな…と思ひます。去年の7月26日に相模原の障害者施設で、沢山の障害者が殺されてしまうという事件がありました。それだけでもつらかったのですが、私が心配しているのは、SNSの書き込みの中で「優生思想」つまり「障害がある人は、そういった状況に追い込まれても、仕方がないんじゃない?」というような若者や、インターネットでそういった感情を出される人が沢山増えているということです。つまり命に線引きをするという状況です。これは線を引いたところがどこにあるか、自分もいらないと線引きされるのではないかと感じながら生きていく…ということの中で生きづらさを感じていくんだろうなということです。

いろいろな人たちが、いろんな立場で生きていくという社会を創っていくために、どういったことができるでしょうか。今、日本では「貧困」ということに対し、二つのとらえ方をしようという考え方が広まっています。一つは「経済的貧困」、お金が無いという貧困です。今、うちの学生や教員にも「貧困ってどういうことだと思いますか？」とお話ししていると「アジアやアフリカで明日、食べるものも無い人たちのことなんじゃないですか？」という答えが返ってくることもあります。確かにそれも大きな問題です。しかし今、日本で6人に1人の子どもたちが、いわゆる何らかの形で厳しい状況にいる「相対的貧困」、簡単に言うと平均所得の4分の1以下で生活している子どもたちが6人に1人の割合でいるという現状があります。



今、なぜそういったことが起こっているかという一つはコミュニティ、つまり地域の中でのコミュニケーションがどんどん低くなってきているということがあります。

それから、ひとり親家庭や核家族化の中で、家庭の養育機能が低くなってきている、そして、福祉や教育の専門職依

存ということがあります。福祉や介護は専門職にお任せ、教育は先生にお任せ、というような体制、つまり自分たちでできるのにしないという体制が、結果として社会的孤立を引き起こしているのではないか、孤独感を感じている方々が、高齢者や障害者だけではなく、若者や子どもたちにも増えてきているのではないかな…と思います。

地域福祉とは、専門職や行政がしっかりと基盤を作っていく憲法第25条、すなわち生存権保障ということをきっちり行っていく「公助」、今日お集まりの地域の皆さんやボランティアの方、NPO等が協力して一緒に助け合っていこうという「共助」、東日本大震災で、また、阪神淡路大震災で見えてきたこと、それは近所で助け合う地域があればあるほど復興が早くできるし、救命率も高いという「近助」、そして自身が努力をする「自助」、この4つの助け合いで、地域みんなが一緒に生きていくということが大切かなと思います。

私の専門は福祉教育ということですが、これからは学校と地域と一緒に助け合っていくということが大切、というテーマがあります。それは、相手の立場になって考えるということ、高齢者の立場、障害者の立場、子どもの立場、それぞれの立場に立って考えていく…ということです。福祉と教育の共通点、それは「みんな違ってみんないい」ということです。みんな違ってどうでもいい、というこ



とではなくて、一人ひとりがとてもかけがえのない命を持っているんだ…ということだと思います。

そして「福祉って何ですか？一言で言ってください」と聞かれたら、私は「決して一人ぼっちにしない心」だと答えます。障害があるから仲間外れ、貧乏だから仲間外れ、高齢になったから仲間外れ…そんな社会は、当事者の人だけが生きられない社会ではなく、いつ自分が仲間外れにされるんやろう…とピリピリして生きていかなければならない、そんな社会になってしまうんだろな、と思います。人間は社会的存在である、つまり人と人との関係性の中で生きているんだ、ということです。

今日お伝えしたいのは「自立」ということを、ちょっと幅広く考えませんか？というご提案です。これは今、学校の先生方にもお伝えしていますし、専門職の皆さんにもお伝えしています。今までは「自立」とはどういうことかという、他人に迷惑をかけたらあかん、自分のことは自分です、と学校の先生も子どもたちに教えてきました。確かに、自分にできることは自分です、これは大事です。でも、他人に迷惑をかけたらあかん、ということになると、お年を召されてきてできることが少なくなったり、障害があつて自分にできることの範囲が限られていたり、特に子どもたちで自分にできる範囲が狭いという状態では、自立ができなくなってしまいます。これを「自己完結型自立」と言います。これは、自分で自立しているように見えて孤立しているのではないですか…と学校の先生方にお伝えします。

そこで特に今、学校の先生方や皆さんにお願いしているのは「助けられ上手になりませんか？」というご提案です。今日お集まりの皆さんは、助け上手の方ばかりだと思います。困っている方がいたら「ほっとかれへん！」という方です。でも「ご自身が助けられ上手になる」ということも、すごく大事だと思います。それは、行政、学校の先生、専門職も住民も同じだと思っています。「自分にできることは自分です」これは、さっきと同じです。ただし、自分一人にできないことは人の助けを受けても、かけがえのない、たった一度しかない人生を生き抜いてほしい、ということです。

なぜ、このようなことを強調してお伝えするようになったかという、滋賀県で6年前、中学2年生の男の子がいじめを苦しんで自殺した…というケースがありました。私は滋賀県と社会福祉協議会から、子どもたちに命を大切にしてもらえるような福祉読本を作りたい、という依頼を受けて、そこで自死の事件のお話もお聞きしました。彼は頑張ったんです。壮絶ないじめの中でも負けずに、学校に行き続けようとしたんです。ただ残念だったのが、彼は自分のお父さん、お母さんに心配かけたらあかん、迷惑かけたらあかん、と思って、いじめのことを言えなかったんです。先生には、もしかしたら言ったかもしれないけど、届かなかったんです。友達も同様です。そこで、福祉読本を作る際に作成委員の先生方、

社協の方、施設の職員の皆さんと「これからの自立は、どうあったらいいのか？」ということをお話ししました。それが先ほどお伝えした、自分でできることは自分です、ただし自分一人ではできないことは誰かの力を借りても人生を生き抜いてほしい、ということです。これ実は、私の言葉ではありません。知的障害者の自立宣言の中に組み込まれている言葉です。自分一人で頑張らなアカン社会、それも大事やけど、自分一人だけで頑張らなくていい、みんなで支え合う、そんな自立を、これからパネリストの皆さんとご一緒に考えていけたら素敵だな、と思います。

「なぎさ」って何ですか？  
パネリストの濱崎さんから打合せの時に聞かれました。  
昔、入所型施設は、施設の中だけで障害がある子どもたちのリハビリテーションや訓練や教育をしていました。残念ながら施設の中だけで、安心と安全は提供できたけれど、



周りの方々は障害のある方との交流が無かったがために、理解を得る機会がどんどん少なくなっていました。そんな時、もう壁を無くしましょう、障害のある子どもたちの施設に、地域のボランティアの方に来ていただきましょう、障害のある子どもたちが地域に出かけて行きましょう、海と陸とを「ダム」つまり「壁」を築いて止めてしまうのではなくて、海と陸との間を行ったり来たりできるような「なぎさ」という空間を作っていくことによって、いろんなことができるんやないか…と思いました。施設が開かれていく、そして利用者さん、地域のいろんな方たちが交流したり支え合っていく、そういった中でボランティアの方が生きがいを作っていく「自己実現のなぎさ観」、そういった「なぎさ」ができたらいよいよね…といったことを書いたのが、なぎさの福祉コミュニティ論です。その中でも、福祉の共育コミュニティ、学校が地域に開いていきませんか…という提案をしています。

ボランティアとは、共に歩いていく人（手話実演）…先ほどの「ボランティア」という手話を思い出してみてください。ボランティアとは共に歩いていく人であり、そして他人の困りごとを無視できない人です。ボランティアに年齢制限はありません。私が出会った中でボランティアの最高齢は95歳の方ですが、かくしゃくとしておられました。その方が「先生、わしはあまり年寄りが好きやないんよ」と言われるので、「何ですか？」とお聞きしたら「だって、わし年寄り嫌いや」とお答えになりました。…95歳ですよ、すごいなあと思いました。自分が何かやろうと思ったら、いくつになってもお元気やなあ…と思いました。

ボランティア活動って何か？それは、自立への援助者、一人で生きていくのがしんどい時に一緒に手をつないでくれる人、そして「社会とのかけ橋」という役割が大きいな、と思います。そして、ソーシャルアクション。今日、お話をうかがって嬉しくなりました。このコラボの多目的スペースを作ったのは住民の方々のお声、要望、というお話を聞きました。行政の制度、福祉の制度は沢山できてきています。でも、制度だけでは物事は変わっていきません。住民の方々やボランティアや市民の方々から「もっとこのスペースを豊かにしていったらどうだろうか」というご提案があってこの多目的スペースができ、さらに地域の皆さんから「ちょっとホッとできる場所があったらいいよね。カフェを作ろう」というご提案が出て、コラボに多目的スペース、カフェが誕生したというお話をお聞きしました。

こうした提案型福祉、これからのボランティア活動、市民公益活動は「汗もかくけど、口も出す」のが、私はとても重要だと思います。後ろに並んでおられる行政の方、耳が痛いかもしれませんが、私はいつも言っています。「これからの福祉は、ボランティアの時代です。共助の時代です。」だから全部、住民やボランティアにお任せじゃないんです。行政がすべきことはきっちりしながら、行政ができないことを市民にお願いしていく、反対に、市民の方々も申し訳ないけれど、汗をかいてください。ただし、汗をかく中で、提案をしてください。「ここ、もっとこうしたらどうだろうか？我々はここまで頑張るけど、できないところは一緒にやっぺいこう」というコラボレーション、つまりこれが協働です。協働は「目的」ではありません。協働は「手段」です。専門職ができること、専門職が苦手なところ、ボランティアの方々が得意なところ、市民やボランティアの方々ではできないところ、お互いの強みを一緒になって力を合わせてやっぺいしていく、ということが大事ななと思います。

お話の最後に、今から「皆さんが言いましたゲーム」というものを、5分ほどしたいと思います。住民どうしが手をつなぐことの大切さ、ちょっと皆さんにお手伝いしていただいて一緒に体験してみましよう。皆さんが言いました、ということだけ、私の指示に従ってやっぺいしてください。このゲームのルールは「皆さんが言いました」というところに続く言葉だけは私の指示に従う、それ以外は私の言うことを聞いてはいけません。

ちょっと練習します。「皆さんが言いました、右手を上げてください」「はい、下ろしてください」…下ろしたらあかんです。(会場一同笑) このゲームの中に、3つの大切な要素が詰まっていますので、また後ほどお伝えします。では、短縮版でゲームを進めましよう。「はい、右手を上げてください、元気がないですね、もっと上げてください」…今ので、手を上げたらあかんです。「はい、下ろして」…で下ろしたらあかんです。(会場一同笑)「皆さんが言いました、手を下ろしてください」はい、手を下ろしてください。

「皆さんが言いましたゲーム」で大切な学びの一つは「笑顔の大切さ」です。皆さんがしかめ面して「ボランティアやりましょう！」と言っても、なかなか共感を得られにくいと思います。笑顔って、とても大事だと思っています。もう一度、手を上げてもらってもいいですか…で、上げたらあかんのですよ。(会場一同笑)

お伝えしたいことの二つ目は「失敗を恐れないこと」です。今、ゲームで手を上げられた方は、一生懸命私の話を聞いておられた方です。つまり、失敗を恐れて何もしないよりは、失敗したら今度は間違わないでおこう…これが「経験」になります。失敗を恐れて何もしない人よりは、失敗したときに経験を通して「わかった」という学びがある人の方が、とてもすてきなと思います。学校の先生にも「失敗したらあかん、って子どもたちに言わないでください」とお伝えしています。子どもたちには「一生懸命頑張って失敗したことによって、沢山学べるよ」と言ってください、とお願いしています。

皆さんが言いました、隣の人と恥ずかしがらずに手をつないでみてください、大丈夫です、初めての方もみんな老若男女恥ずかしがらずに、はい、皆さんが言いました、よかったら手をつないでみてください、そのしっかり握った手を高く上げ…かけたらあかんのです。(会場一同笑) 共に手をつないでくれる人がいるから、失敗しないで済む人もいれば、失敗しても一緒に笑ってくれる人もいます。皆さんが言いました、ちょっとだけ手を上げてもらってもいいですか、これが「共に生きる 共に歩む」ということ、一緒に歩いていくということです。「はい、手を下して」…って下ろしかけたらあかんのですよ。(会場一同笑) 自分が支えていたところ、自分が少し手の力を抜いても、誰かと手をつないでいたら支えてくれる人がいます。これが、私は「助けられ上手」ということだと思います。

皆さん、今度は絶対無理しないでくださいね、はい、「皆さんが言いました、右手だけ上げて左手だけ下ろしてください」…というのは、できません。なぜか？自分の権利だけ主張すると、つないでいる人の権利を奪ってしまうことになるからです。これを「人権侵害」と言います。はい、下ろしてください、で下ろしたらだめですよ、(会場一同笑) はい、皆さんが言いました、両手を下ろしてください、皆さん、ありがとうございました。(会場一同拍手)

一番お伝えしたかったことは何か、一人で頑張るのも大事だけれども、一人で頑張られへん時には、いろんな人と手をつなぐということが、すごく大事ななと思います。この「皆さんが言いましたゲーム」は、障害のある子どもたちと一緒にしていたゲームで、もう40年間やり続けています。ですから、これを皆さんもお仲間の方と一人でも、二人でも、ご一緒にやっていただければと思います。今日お伝えしたかったこと、それはいろんな人たちと手をつなぐことによって、自分自身も、そして周りの人もみんな元気になっていける、ということをお伝えできていれば嬉しいな、と思います。皆さん、本当にありがとうございました。(会場一同拍手)

	<p>新崎先生、ありがとうございました。ご講演を聞かれてのご感想、ご質問につきましては、この後パネルディスカッションの中でおうかがいする時間をおとりしたいと思っておりますので、宜しくお願いいたします。ただいまからパネルディスカッションの準備をいたしますので、5分ほど休憩を挟みます。</p>
	<p>◀ 休憩 ▶</p>

## パネルディスカッション

司会	<p>お待たせいたしました。それでは準備が整いましたので、パネルディスカッションをはじめさせていただきます。開催に先立ちまして、東日本大震災の発災から本日3月11日で6年間の経ちました。お亡くなりになられました方々、最愛のご家族を失われましたご遺族の皆様に哀悼の意を表しますと共に、ご冥福をお祈りするため、黙祷を行います。(黙祷)</p> <p>ありがとうございました。それでは、パネルディスカッションを始めさせていただきます。これから先のパネルディスカッションの進行につきましては、コーディネーターということで、NPO法人とよなかESDネットワーク理事長であり、豊中市社会教育委員でもいらっしゃいます上村 有里さん<small>かみむら ゆり</small>さんをお願いしております。それでは上村さん、宜しくお願いいたします。</p>
上村さん	<p>はい。ありがとうございます。只今、ご紹介にあずかりました、とよなかESDネットワークの上村と申します。こちらのコラボでは、カフェや、親子ふれあい広場等、どこかで見かけた顔だな…と感ずかされている方もいらっしゃるかな、と思います。とよなかESDネットワークとは、持続可能なまちづくりをめざして、様々な場所で様々な学び合いの場づくりに取り組んでいるという団体です。あたたかい千里のまちをめざしていくには、どのようなことを大切にしたらいいのか、先ほどの新崎先生のお話を受けて、皆様とご一緒に考える時間として、パネルディスカッションを始めたいと思います。力及ばずかもしれませんが、本日のコーディネーターを務めさせていただきます。どうぞ宜しくお願いいたします。(会場一同拍手)</p> <p>それでは、今日のパネリストの皆様をご紹介いたします。皆様の方から向かって右側から、豊中市千里文化センター市民実行委員会副実行委員長で、地域においてもいろいろな活動をなさっている、濱崎 定也さん<small>はまざき さだゆ</small>です。(会場一同拍手) 続いて、お隣はNPO法人ウィークタイ代表理事の泉 翔さん<small>いづみ しょう</small>です。(会場一同拍手) 宜しくお願いいたします。そして、真ん中のお二人です。今日は吹田市からお越しいただきました。</p>

NPO法人市民ネットすいた理事長の長谷川 美津代さんです。(会場一同拍手)  
そのお隣は、ファミリーマート吹田栄通り商店会店オーナーでいらっしゃいます、  
清水 慎一郎さんです。(会場一同拍手) どうぞ宜しくお願いします。

この4名の方から、ご意見をいただいた後、最後に新崎先生の方からコメント  
をいただいて、パネルディスカッションの締めくくりとさせていただきたいと思  
います。新崎先生、引き続き、どうぞ宜しくお願いいたします。(会場一同拍手)  
今日は手話も教えていただきましたし、一緒に参加型のゲームもして、お隣どう  
し手をつないだりして、どんな方が来られているかな…ということも、お分かり  
いただいたかと思います。先ほどの新崎先生のお話の中で「なぎさ」という言葉  
をお伝えいただきましたが、こちらとあちらの境界を作らずに、行ったり来たり  
することの大切さを教えていただき、私自身も日頃の活動と重ね合わせて、改め  
てそういうことが大切だな…と実感いたしました。



「なぎさ」という空間を作っていくきっかけとしては、まず「出会う」というこ  
とが大切であり、また「交流」というお話も出てきました。二者、すなわち違う  
立場の方々をつないでいくことって、とても大切なんじゃないかな…と思うので  
すよね。

このあたりのことを、後半のキーワードにしていこうと思うのですが、今日4  
名の方を紹介させていただいた時に「あれ？何でコンビニの店長さんがおられる  
のかな？」と思った方もおられるかと思いますが、真ん中のお二人にどんな取  
り組みをされているのか、ご紹介いただきたいと思います。では、長谷川さん、  
清水さん、宜しくお願いいたします。

清水さん

初めまして。ファミリーマート吹田栄通り商店会店のオーナーをしております、清水と申します。(以下、パワーポイント映像及び資料を参照) 栄通りにありますお店は、この映像にもあるようにJR吹田駅から徒歩すぐ近くの所にあります。ここは本当に、商店会の真ん中にあるという変わったお店です。このお店ができて、ちょうど1年が経ちます。状況としては、吹田の古くからある街の中に、ぽつんと立地しているお店でして、お店は他にもいろいろあるのですが、コンビニエンスストアはこの一店舗だけ…となっています。


店舗の2階に40席のスペースがある…ということで、この席数の多さも、なかなか見られないのではないのでしょうか。最近、イートインスペースがあるお店は増えてきているのですが、国内でも40席を有するお店というのは数店舗くらいではないかな、と思います。続いて、これは開店前の風景なのですが、長谷川さんのところのNPO法人など、色々な市民の方々に活動で使っていただくための備品を、オープン前に備え付けようということで、カタログラックであったり、パーテーション、子育て中の方も利用していただけるようにおむつ交換台であったり、いろんな方に利用していただきやすいように、という思いで作らせていただきました。



そして、もう一つ「掲示板」の存在があります。NPO法人の色々なチラシであったり、何月何日にこんなイベントがありますよ…ということがわかるように、カレンダーも貼っています。気軽にイベントに参加していただけるように…ということで、こういった掲示板を作らせてもらっています。実際の活動では、40席あるので全席を使う場合だけでなく、一部をパーテーションで区切って利用していただく…ということもあります。イベントの情報を小耳にはさんだ方が、飛び入りで是非参加したい!ということもあります。

各イベントは概ね定期開催されており、いつここにすればどんなイベントがあるか…ということも、皆さんに知っていただいています。栄通り商店会の会長さんもなかなか熱心な方なので、このスペースで商店会のイベントも活発に行われている…というお店になっています。

スペースの使用には一定のルールがあり、営利関係つまり金銭の受け渡しをしない、ということがあります。我々も商売としてお店を運営していますので、たと

	<p>えばそこで壺を売られても困る…ということです。基本的には自由に使っていたのですが、何もかも自由に…ということではなく、長谷川さんのところでまず使用登録をしていただいて、予約をお取りいただくという形で使っています。今は40団体ほどの利用があり、NPOなどの市民団体やサークル等が活動されています。</p>
<p>長谷川さん</p>	<p>はい。今、清水社長さんがお話しくださったように、「栄えるカフェ」ができるまでの間のことですが、「コンビニの2階に、ちょうどいいスペースがあるよ」と聞いた市民である私は、早速「使わせてください」とお願いにうかがいました。こういった使い方はいかがでしょうか…というご提案もさせていただきました。</p> <p>一般的に市民団体というのは、公共施設を使う場合、1か月前や3か月前等に抽選で活動のための場所取りをしていかななくてはならない、ということがあり、たとえば定例で何週目の何曜日を使いたい…といった場合に、なかなか希望通りの場所が使えない、ということも多々あります。</p> <p>しかし、ここでは1年前から予約可能ということになっていますので、たとえば1年間、第3金曜をお願いします…という場合でも、先取り可能となっています。</p> <p>ここでは「がんサポートカフェ」ということで、がん患者やそのご家族の方が集まりながら情報交換をしたり、「最近どう？」といったような交流をしたり、行政が設定する場に比べてフラットに、いろいろなお話をいただきやすい場所になっているかと思います。ちなみに私は、毎月「居酒屋」をやっています。そんな場になっています。</p> 
<p>上村さん</p>	<p>ありがとうございます。今日、ファミリーマートの清水さんには、事業者さんの立場でお越しいただき、お話をうかがいました。また、お店がただあるだけではなくて、そこをきちんとコーディネートする、つまりスペース利用のルール作りも含めて管理を担当される団体さんが入ってくださっている、そういったお世話役をしてくださっている立場ということで長谷川さんにお話をさせていただきました。清水さん、長谷川さん、ありがとうございました。</p> <p>お隣は、泉さん、濱崎さんのお二人です。活動についての詳細は、お手元の資料をご覧ください。ちょうどこの2月25日、26日に、この千里コラボで「若者当事者全国集会～ひきこもっていた当事者・経験者 豊中で集まろう！」という、生きづらさを抱えた若者による全国集会が行われたということですが、その主催団体である「ウィークタイ」の代表理事を務められている泉さんです。生き</p>



	<p>づらさを抱えた若者の方々に、どうすれば自分たちの生きづらさを解消できるか、といったことも含めて、いろいろな支援をされていますので、詳細については後ほどご説明いただきます。</p> <p>濱崎さんは、コラボ市民実行委員として、こちらのカフェや屋上庭園の管理、コラボ大学校等の運営に携わっておられます。特に、ボランティア応援コーナーや多文化カフェといったところで主体的に皆さんを引っ張りながら、市民活動に取り組んでおられますが、濱崎さんの方で自己紹介に補足があれば、お願いしたいと思います。</p>
<p>濱崎さん</p>	<p>濱崎と申します。宜しくお願いします。実行委員会は、このコラボができた頃から活動をスタートして、私は2期生にあたります。1期生の方が、かなり苦勞されて、いろんなことを考えながらルールを敷いてくださったと思います。私は、そのルールに乗って進んできただけで「汗をかかない」ということをモットーにしてやっておりますので、これでも実行委員がやれるんだな…とか、支え合いの活動の一部になれるんだな…とか、思っただけなら幸いです。百人が汗をかくのではなくて、汗をかかなくても、少し何かを手伝ってくれる人が大勢いたらいいのかな…とか、そんな気持ちでやっています。</p> <p>今日はフォーラムのテーマに沿って、主に「ボランティア応援コーナー」の中心にご紹介したいと思っています。ボランティア応援コーナーは当初、ここにおられる上村さんが立ち上げられて、ボランティア活動を希望される方の相談に乗って活動先を紹介するといった活動をしています。</p>
<p>上村さん</p>	<p>はい、ありがとうございます。地域であったり、ボランティアであったり、そういったことへの関わり方は多様であっていい、という実践をされている濱崎さんです。</p> <p>それでは、つながり、なごさ、支え合い、あたたかいまち…といった本題に入っていきたいと思います。</p> <p>先ほどお声を聞けなかった泉さんに、お話をうかがいたいと思います。この「つながり」ということも含めて、ウィークタイの皆さんがコラボで活動されるようになったきっかけから、活動についてご紹介いただいてもいいですか。</p>
<p>泉さん</p>	<p>はい、ありがとうございます。そもそも千里コラボで活動するようになったきっかけが今日のテーマ「つながり」といったところなんです。私事ですが、20</p>



14年に1年間、高知に住んでいまして、2015年の春に大阪が地元なので戻ってくることになり、豊中市に住むことを決めました。

その時に私自身がひきこもりや不登校の人たち、あるいはそういった経験のある人たちで集まっておしゃべりをする会というのを、いろんなところで行っていて、それが「だらだら集会」という名前なんですけど、開催できる場所を大阪市内等を含めて探していて、だいたい「だらだら集会って何やねん？」みたいなところから入られることが多いのですが、2005年から始めていた集まりでしたので、そういった反応で一喜一憂しないような経緯もありました。

ところが、豊中南部の庄内公民館というところに行くと「へえ～！面白そうなこと、やっとなやないの」と言っていただけのことがありました。そこで、4月に1回目の「だらだら集会」をやることになったのですが、当時庄内公民館の館長だった田中館長がひきこもりの集まりに「どんなことやってるんですか？」と実際に来てくれたんです。それが不思議な感じというか、実際に興味を持ってくれる人がいるんだな…という感じでした。その後、田中さんから「一緒に別のことやらへんか？」といったお話もいただきました。それまで、ひきこもりに理解のある人からも、一緒に何かしませんか…というような話をいただいたこともなかったもので、とても嬉しく思いました。「ひきこもりって、あんまりよう知らんねんけど、一緒に何かやらへんか？」という関心を持ってくれたのが、庄内公民館の田中館長でした。



僕たちも、あたためていた企画があったので、そういうお話をさせていただきました。それが「もぐもぐ集会」というもので、「だらだら」に「もぐもぐ」で何やねん…という感じですが、この「もぐもぐ集会」には一応ちゃんとした理念はありまして、ひきこもりとか不登校の人が就職したり社会復帰した時に、お休みの日があります。お休みは普通は楽しい時間ですが、1週間忙しく働いて、ふと一人になる休日は孤独になる時間でもあります。そうすると、月曜日からまた仕事に行けるのか…と不安になるんです。そういう時間を一緒に過ごし

たり、ご飯を食べたりできないかな…という思いがあったので、それを田中館長に話したら「いいやん、一緒にやろう」ということで、「もぐもぐ集会」の実施が決まりました。

しかし、行政の人事は罪深いですね、4月に田中館長が異動になられましたが、館長は自分が異動しても引き続き集会ができるように、制度的なことや必要な手

続き等、進めてくださっていました。そこで4月、予定どおり1回目の「もぐもぐ集会」を開催しました。その振り返りの中で、メンバーと「会自体は理念でやり始めたけど、田中さんと一緒だったから、今までこうしてやってきたんだ」という思いを共有し、いろいろ手続きを進めてくださっていたのに申し訳なかったのですが、田中館長を追いかけて千里に活動拠点を移すことになりました。「ここで田中さんと一緒にやりたいので、いいですか？」と話をし、以来ここでやらせてもらっています。

上村さん

ありがとうございました。先ほど挨拶をしてくださった田中センター長と泉さんが出会われたことで、今の活動につながっているということ、田中さんという人のおかげで今があるんだ、というお話をしてくださいました。実は、その「だらだら集会」とか「もぐもぐ集会」に、全国からひきこもりの方が来られているそうなのです。それは、泉さんを頼って皆さんが集まっておられるのですよね。

そういった意味では、「つながり」の「つなぎ目にいる人」の存在が一つのキープポイントかと思えます。皆さんの地域にも、ひきこもりだったり、元ひきこもりの方がいらっしゃると思うのですが、気付いておられないですよ？実は私自身もそうだったのですが、どこにいるんだろう？どんなことを求めているんだろう？そんな風に思っていたのですけれども、ひきこもりの方と実際にお話してみると、自分たちが何かしてもらおうことばかりを望んでいるわけじゃないんだ…ということを知りました。どこか出会いの場所を求めていたり、自分たちも何かに役立ちたい…ということを目指していらっしゃるんだな、ということがよくわかりました。そういったところで核となってくさっているのが泉さん、そしてその泉さんご自身をつないでくださったのは田中さん、というお話をうかがいました。



そして、お隣の長谷川さんは、ファミリーマートだけじゃなくて、いろんな地域のつなぎ目として「つなぎ役」としてご活躍されているかと思うんですが、そういった中で「つながり」を実感されていることなどを、ご紹介いただいてもよいでしょうか。

長谷川さん

私自身は、人をつなげている気はないんですよ、実は。困ったときは自分一人で完結しない、ということが大切かな、と思っています。そして「あ、あれ困ったな…」ということがあれば「あ、あの人に頼んだらいいわ！」と思って、つつい人をお願いしちゃうんですね。すると皆さん、すごい力を持った方ばかりだから、長谷川に言われたら怖いからなのか、皆さん「ええよ！」とってください

る方ばかりなので、こちらも「お願い！」とお願いしています。

実は、この清水さんとお知り合いになったのも、十何年前からJR吹田駅の栄通り商店会の会長さんともご一緒しながら、まちの活性化をずっとお手伝いしてきたという経緯がきっかけでした。商店街のおじさんと自治会と、男性ばかりの会議に女性が1人で行って「おじさん、そんなことばかりしてても商品売れへんねん」なんて言いながら、おじさんたちとつながっていたので、清水さんという素敵な方をご紹介いただいたんです。そのおじさんも「商店会が元気になってほしいねん」と言って、「ファミリーマートも2階建てにしよう」とおっしゃったのも、その方です。そして「そこを、皆が集まる場所にしよう」と言われたのも、こうした商店会の方々です。こうした人間関係を作っておくのが、つながりの秘訣かな…と思います。



上村さん

はい、ありがとうございます。困ったときは誰かにお願いをする…ということで、お願いをされた清水さん、いかがでしょう？お願いをされた時のお気持ちなどお聞かせください。

清水さん

はい、会長は地域の会社でずっと地域に関わっておられて、一方ファミリーマートは全国チェーンの会社ですが、実は私の父の代から、うちは酒屋を営んでおりました。いわゆる「サザエさん」に出てくる三河屋さんみたいな昔の酒屋です。私はそれを見て育ってきているので、地域の方々に関わるのは必然だと思っています。でも、地域の皆さんの「コンビニのイメージ」ってどうですか？ほしい「若い人の店」という感じでしょうか。震災後にそのイメージが変わり「便利に使える店」という印象を持たれ始めました。

「コンビニもモノ売っているだけじゃないんやで」と、目の前でお客さんに来ていただいたら、お名前とお顔を覚えて「〇〇さん、いつもありがとうございます」と対応するのが酒屋としての心意気なので、こうした思いを汲んでいただいて、長谷川さんに「じゃ、お願いします」ということで、つながりが生まれました。こうした部分を表現したくて、こういう思いがあのお店に込められた「つながり」として、進んできているのかな…と思います。

上村さん

ありがとうございます。清水さんご自身が酒屋時代から築いてきた「つながり」ということが今の「栄えるカフェ」に生きてきたというか、ものを売るだけではない、人と人との交流の場づくりにつながってきたのかな、と思いました。

	<p>豊中という地域でも、自ら歩いて地域のつながりを築いてこられた濱崎さんの方から、ご自身がされている「つながり」を作る活動についてお話しいただいてもいいですか？</p>
濱崎さん	<p>だいたい歳がいくと、ひねくれてくるので、進行役の思う通りには、いうことを聞かないので、失礼します。私はまず、気軽に声をかけていく、ということを中心にしています。まず、声がけを試してみる、それだけでもいいと思っています。</p> <p>今日ここへ来てびっくりしたんですが、この前ここでチラシを探しておられた方で、「何を探されているんですか？」と私からお声がけさせていただいた箕面の方が、この場に来てくださっています。それで「ちょっと私、家で讃美歌を歌っているので来ませんか？」と言われまして、それでまた、ひょこひょこ出かけて行くわけです。そうすると、この方のところに歌いに来られている方が、実は私の歌の先生のお弟子さんだったり…というつながりもどんどん出てきて、だから何でもいいからひと声かけるという活動が「支え合い」、「つながり」づくりだと思ってやっています。</p> <p>それから「コラボ新聞」がありますが、向こう3軒両隣に「興味があれば来ませんか？」とポストイングしています。他にもここでサークル活動をされている方にも、この新聞をお渡しして実行委員会活動のことをお伝えしています。すると、また向こうからも、いろいろと情報をくれますし…ということで、皆さんが「広めたいな」と思うことがあれば、そこから声がけすることで活動になるんだよ…ということをお伝えしたいと思っています。</p>
上村さん	<p>はい、ありがとうございます。濱崎さんは、ボランティア応援コーナーの中で、相談に来られた方と実際に、一緒に現場に行って新たなつながりを作っておられるとお聞きしているのですが、そのあたりのエピソードを教えてくださいませんか？</p>
濱崎さん	<p>いや、そんな大層なことはしていないのですが、ボランティア応援コーナーに来られるのは圧倒的に女性が多くてですね、夫が亡くなって1年とか3年とか、それぐらいひきこもっておられた方が多いんですね。そういった方に通り一遍の対応をすると、また高齢者のひきこもりになってしまう可能性もあります。ですから、私は、ボランティア応援コーナーというのは「高齢者のひきこもりの予防活動だ」という位置づけを、ちょっと意識しながらやっています。ただ単に「あなたのボランティア希望はどこですか？ここですか？」というやりとりだけではなくて、なるべくその方のお話をうかがって、適当な紹介先がなくてもお話だけでもして帰っていただくとか、そういうことを心がけています。</p> <p>そうしていると、家に帰ってから「あの人のボランティア先、ここがよかったかな？」と思いつくこともよくあるんですね。そんな時は電話番号を聞いていますから、ご本人にお電話して「ここ、どうでしょうか？」等と連絡しています。</p>

そういうふうにして紹介したところで、また逆に「濱崎さん、ここにこういう方いないかな？」等と向こうから新たなご相談をいただいたりすることもあり、こちらも「そういうことであれば、今度ボランティア応援コーナーに来られた方に、そういう方が来られたらご紹介しますね」とお答えしたり、そこからまた、新たなつながりが生まれています。

こういった、一定期間、外部の人と交流する機会がなく、ひきこもっておられた方というのは、とても不安を感じておられるんですね。だから、不安なまま「ここ、どうですか？」だけではダメなわけで、何か不安そうな顔をされていたら「じゃ、私も一緒について行きますね」と活動先までついて行って、お互いに話をして安心感を持っていただくようにしています。「あんなだったら、やめよう…」とか、そういったことがないように、せっかく来てくれた人を引き留めて、ひきこもりの予防にでもなれば…と心がけています。

上村さん

はい、ありがとうございます。ちょっとチラシを渡した方のお顔も覚えておられるのが、すごいなあ…と思います。だから、そういった細かい心配りで足を使って、ちゃんと汗をかいておられるじゃないですか。こうして動いていらっしゃることが、今の活動につながっているな…と思います。パネリストの皆さんそれぞれのお話をうかがって、皆さんのそれぞれのスタイルで活動されておられるな…と感じました。

ではここで、聞いていらっしゃるばかりでは面白くないかな…とも思いますし、今日お集まりの皆さんも地域で何か活動をされている方が多いのかな…と思います。そこで「つながること」って、どんなことでしょうか？ちょっとお隣同士で、お話ししていただく時間を取りたいと思います。先ほどの新崎先生のご講義の中で、せっかく手もつないでいただきましたので、ちょっとお隣の方2人ないし3人で、今までのお話を聞かれての感想等をまじえて「つながる」ということについて、お話をしていただきたいと思います。では、お隣の方と握手していただいてよろしいでしょうか？ちょっと離れている方は前後でお話ししていただいても構いません。今から5分間、お話タイムとさせていただきます。パネリストの方も、お隣同士でお話ししてください。はい、早速動いてくださって、皆さん素晴らしいです。ご感想でも、今取り組んでおられることでも構いませんので、皆さんで自由にお話してください。

◀ 会場参加型で約5分間の意見交換 ▶

上村さん

皆さん、ありがとうございます。はい、大変盛り上がりまして、まだまだお時間が足りないかな…と思うのですが、よかったら「こんなお話ししましたよ」ということで、ご紹介いただきたいな…と思うのですが、「つながる」というテーマでご紹介してもいいよ、という方、いらっしゃいますか？こういう時に私

	<p>の知り合いがいると指名される運命なのですが、今、市民実行委員の京谷さんと目が合いました。京谷さん、お隣の方とどんなお話をされたか、ご紹介いただけますか。</p>
<p>京谷さん</p>	<p>はい。昔から「日本語で話そう会」という外国人の方と交流しながらお話しする会を行っていました。当時、梅田のDDハウスにありました「シェーキーズ」というピザ屋さんで、ここで毎週月曜日の夜7時になったら集まって、その辺で食べてる…という場所を作って、そこに色々な外国の方が来られて、メニューを見て食べ物を注文したりして自由に座って、皆で一緒に食べながら夜9時くらいまで賑やかに喋っている…ということをしておりました。それを続けていましたら、何十人と参加者が増えてきまして、月曜日にそこに来たら誰かと会えるというような、僕らはもう、大阪に灯台ができたなあ…と思っています。</p> <p>留学が終わって一度帰国された方が、何年かぶりにまた日本に来られた時に、友達がなかなかできへん…でも、大阪・梅田のDDハウス2階の「シェーキーズ」の月曜日に来たら仲間に会える、という場を作っていたのが、ものすごく良かったな…と思っています。それで、ファミリーマートさんの2階のお話で、そういうような空間を作ってはるんやなあ…と。集まる場というのが、たとえばどこかを借りてやっているということであれば、そのドアを開けて入っていくのは勇気がいるんです。でも、お店とか、そういう場を提供してもらえたら、別にそこに入るのに勇気はいらん、それは、ものすごくいいものを提供してもらったな…と思います。それが僕ら長い間、何十年も続けていたのに、売り上げにあまり貢献せんかったから「シェーキーズ」が閉店してしまったのかな…と、ちょっとお店にもものすごく迷惑かけたかな…という反省もしながら（会場一同笑）皆さんのお話をうかがっていました。ファミリーマートさんも、頑張ってください。（会場一同拍手）</p>
<p>上村さん</p>	<p>はい、ありがとうございます。「食べる」ということをきっかけに集まれる場があった…というのは、とても素敵なことですよね。先ほど出番を待つ間に控室でお話ししていた時に「敷居を下げる工夫」ということも、栄えるカフェの長谷川理事長からお聞きしましたので、ちょっとご紹介いただいてもよろしいでしょうか。</p>
<p>長谷川さん</p>	<p>はい。先ほどスライドで見ていただいたとおり、貸し切りもあるんですが、栄えるカフェには「パーテーション」もあるんですね。団体がいつも使えるようにお店で部屋の隅の方に置いてくださっているので「今日は10人くらいかな」なんて言いながら、皆でパーテーションを使って活動場所を作ります。</p>



たとえば、事前に「今日ここ7時から10名くらいでお願いします」ということをカレンダーに書き込んでおけば、1階で店長さんが「ここ7時から予約席」という用紙を置いてくださっているんです。そうすると、前に使っておられた団体さんも部屋でスペースを空けて待っておいてくださるので、それがとてもありがたくて、そこで私たちはパーティーションで仕切りながら、何か趣味のサークルをしたり、「がんカフェ」で癌のお話をしたり、色々な活動をしているのですが、何せパーティーションなので、ちょっと様子を覗いてくださる方もいらっしゃいます。

すると、パーティーションの外におられた方が「がんカフェ」の時に「実は、私の父も癌なんです」とか言って入ってきてくださったり、手芸のサークルでお正月の祝い袋を作っていたら、またパーティーションの向こうから「私も作りたいわ」と言って入ってきてくださったりして「じゃ、一緒に作りましょうか」とか言いながら、一般の貸館では無いような「敷居の低さ」あるいは垣根が低いということ、これは先ほどの新崎先生のお話の中で言われていた「なぎさ」という空間なんです。なぎさの上のなぎさという感じで、すごくいい空間になっています。

上村さん

はい、ありがとうございます。扉を開けて入る…って、結構勇気がいるところで、扉の無い場づくり…本当に声が漏れ聞こえるようなしきりを行ったり、来たりできるというような場を作られているって、本当に素敵なお話をありがとうございます。ほかの皆さんで「つながる」ということについて、お話を紹介してもいいよ…という方、おられませんか？（会場より挙手）はい、ありがとうございます。では、お願いします。いつもコラボに常連で来てくださっています。ご紹介をお願いします。

飯田さん

はい。私は、しょっちゅうコラボの方でお世話になっております飯田と申します。別に何の会をどうしよう、ということではないのですが、今お隣の方とお話ししておりましたら、初めてお話しする方だったのですが、私の考えとしましては、ずっと以前から聞いていたことなのですが「人は一日20人の方とすれ違わなければ健康に良くない、また同じ年代の方とばかりすれ違って健康に良くない、つまり20人のいろんな世代の方とすれ違うと健康にいい」（会場一同笑）ということは、家にひきこもっていたらダメだ、ということなんです。そういうことを聞いておったものですから、なるべく外へ出るようにしているんです。



それと、私は若い人とお話をすると元気がいただける、という大変な欲を持っておりまして（会場一同笑）青年の方はもちろん、幼稚園の子どもたちとも、すれ違ったら、なるべく声をかけるようにしております。それで、こちらが話が合



	<p>いそもないような知らない人と付き合うにはどうしたらいいのか、ということも言われるんですが、やっぱり話しかけると「どうも、こんにちは」から始まるんです。人によったら話しにくい、という人ももちろんあります。それで、私だけがぺらぺら喋っていたら全然ダメなんで、相手の方の声を聞く、つまり「聞き上手」になったら、ある程度いろいろ、そういった方のこともわかっていくから、こういうふうにしたらどうですか？ということなんです。私は、だいたいそういうふうにしております。そうすると二度目に会ったときには「あ、こないだの奥さんやね！」と言っただけですし、子どもたちも「あ、あのおばあちゃんや！」と声をかけてくれます。それで私は、元気をいただいているんです。こんなことでよろしいのでしょうか。(会場一同拍手)</p>
<p>上村さん</p>	<p>はい、ありがとうございます。「一日20人とすれ違うと健康によい」というお話は私も今日初めてうかがって、いいこと聞いたな、と思っています。話しかけにくい人に話しかけるという意味では、泉さんがされている「だらだら集会」等で、きっと話しかけにくい人もおられるのかな、と思うのですが、何かふだん工夫されていることとか、場づくりなど環境面で、どういう人でも安心して居られる場というのを、こういうふうにして作っていますよ、ということがあれば、よかったらご紹介いただけますか？公民館のお部屋割りなんかも、工夫して作っていますよ…というお話もうかがっていますが、いかがでしょうか。</p>
<p>泉さん</p>	<p>はい。そうですね、つながることが大切だ、とうことは、それは間違いないです。それは確信しています。ただ、例えばつながりを維持したり、深めたりするために、インターネットの会員制の掲示板に住所や名前などを出して、密に交流できる仕組みをつくっているのですが、そのつながりがしんどくなる時がある、ということもまた、現実にあるんです。それが葛藤であり、それが僕の慟哭というか…つながってないと命守れへんけど、つながってるからしんどさもある、ということなんです。それが自分で居場所をつくる時に考えることです。</p> <p>そして先ほどの「すれ違う」という表現が素敵だな、と思いました。疲れた時にひとりで過ごす時間は大切なんです、一人自部屋で塞ぎ込んでしまうのは、あまりいい時間の過ごし方ではないように思います。同じ塞ぎ込むでも、どこか外に出て塞ぎ込んだ方が、きっと健康的です。そのファミリーマートの上のスペースなんかも、そうかな、と。僕も「一人になりたい、関わらんといてくれ」と言っていた時もあるんですが、そういう時でさえ周囲に誰か人が居る安心感というのは感じる事があって、とりわけ自分の事をちょっとだけ気にかけてくれるような人が居ることはとても嬉しかった…というのはあるので、そういうふうなオープンになれる場、オープンだけれども一人になれる場というのが必要なのかな…と、無茶苦茶なことを言っているように聞こえるかもしれませんが、そういうふうには思います。</p>

<p>上村さん</p>	<p>はい、ありがとうございます。昨晚、長谷川さんともご一緒した、吹田であった居場所づくりの催しの中で、引きこもりの方が「一人で居たいんだけど、ネットカフェに行く」というようなお話をされていて「誰も話しかけないけれども何か、人いきれの中で一人で過ごせるのがいい」とおっしゃっていたのが、何か泉さんのお話と重なるな…と思います。ひと気はあるけれども、つながりがしんどくなる時がある、というのはまさにおっしゃるとおりかな、と思います。ありがとうございました。</p> <p>さて「多様なつながり方」だったり、「多様な存在の仕方」があってもいいのかな、というふうに思うのですが、最後にもうお一人だけ「つながり」について、お隣の方とお話しされたことをご紹介いただいている、という方がおられたら、いかがでしょうか。では、吹田からの応援団ということ来てくださっている、ラコルタの柳瀬さんにご紹介していただきたいと思います。</p>
<p>柳瀬さん</p>	<p>はい、ありがとうございます。吹田にも、このコラボさんのようにこれだけ沢山の人が入れるようなスペースではないのですが、吹田にも市民公益活動センター「ラコルタ」がございまして、そちらから参りました。本日は吹田からの応援団ということで来ております。私は職員の方とお話ししていたのですが、まさに「つながる」ということで、先ほどの濱崎さんがおっしゃったことが面白いな…と言うと失礼にあたるかもしれないのですが、「汗をかかない」ということで、自分ができること、無理をしないというか、できる範囲で、できることをやっていく…とおっしゃりながら、一方でチラシを取りに来られた方のお顔を覚えておられて、その方だけではなくて、少し気がかりな方には付き添いながら、色々な活動のご紹介もされている…ということもおっしゃっていて、無理をしないけれども、ちょっとだけ無理をする…という、その自然体が素敵だな、と思いました。</p> <p>どうしても「ボランティア」というところの中に「世のため、人のため」とか、そういったイメージがあって、どうしてもハードルが高く思われてしまう部分があるのですが、今こうして前に並んでおられる方々は、自分ができることを無理なく自然体でされているな、ということをお話からうかがいまして、私自身も非常に参考になった次第です。ありがとうございました。(会場一同拍手)</p>
<p>上村さん</p>	<p>はい、ありがとうございます。これを受けて濱崎さん、いかがですか？</p>
<p>濱崎さん</p>	<p>はい。こんなにご好評をいただけるとは思ってもよらず、ありのままに、あの「アナ雪」のつもりで、ありの～ままの～と喋っているだけなんですけど、(会場一同笑) 皆さん案外、ここまで来られている方に声をかけられないんですね。それで、</p>



	<p>こういうことを言うと、ジェンダー問題と言われるかもしれませんが、私が声をかける時に「どうせ、大阪のおばちゃんや」と思って、喋っているわけなんです。（会場一同笑）まあ、10人くらいに声をかけたら、だいたい8人くらいは反応してくれるんですね。それでパイと出ていく人なんて、2～3人いるかいらないかというくらいですから、その辺で立ち止まって何か探しておられる方がおられたら、とにかくボランティア応援コーナーに限らず声をかけています。</p> <p>こうしてぶらぶらと声をかけて歩いていきますと、向こうも「何かやっではるんやな」というところで、まずそこから始めていただくといいのかな、と思います。だから「支え合い」というと大げさですけど、私はパソコンもできませんので、事務所の人にご迷惑をおかけしたり、助けてもらったりしてるんですけど、そういうことの一つで実行委員活動ということをやっていますと、それが一つの「支え」になっております。</p>
上村さん	はい、ありがとうございます。支えているようで、実は支えてもらっている、ということですかね。
濱崎さん	はい、そうです。それが言いたかったんです。（会場一同拍手）
上村さん	さっき、新崎先生の「助けられ上手」というお話がありましたけれど、長谷川さんがよく「傾聴 <sup>けいちよう</sup> 」とお話でもおっしゃっておられますよね。元気すぎて意地を張っている高齢者に向けて、もっと「助けて」って言える高齢者になろうね…というお話をされていましたが、ご自身が「助けられてるな」「支えられてるな」と思う瞬間があったら、お聞きしたいです。清水さん、どうですか？日々、感じていらっしゃる事等、教えていただけますか？
清水さん	はい、そうですね。やはり、コンビニエンスストアって一日千人くらいの方が来られるんですね。当然、一度だけというお客様もいらっしゃれば、毎日来て下さるお客様もいらっしゃって、僕が幸い、池田・吹田・箕面・豊中で複数のお店をさせていただいているんですが、この間、池田のお店に行くとお客様から「ああ、帰ってきたんか」と言われまして、「久しぶり」とかではなくて「帰ってきたんか」と言っていたんですね。そういう時に、覚えていただいているし、僕もそのおじさんのことを覚えているし、そういう「つながり」が、いつまでもあって、温かい言葉で迎えていただけると「ああ、お店をやっていてよかったな」というところを感じますね。
上村さん	はい、ありがとうございます。「お帰り」って、すごくいい言葉ですよ。お客様じゃなくて、一緒に居る「仲間」という声かけかな、と思います。ありがとうございます。長谷川さん、逆に「支えてもらっている」ということについて、いかがですか。
長谷川さん	はい。「栄えるカフェ」は、いつもコンビニのスタッフの方に支えていただいております。というのも、毎月毎月お部屋をお借りするんですが、私はなかなかそ

	<p>の場所に行けないので、記録ノートをとっていただくんですね。そうすると、お店のスタッフの方が先ほど申しましたように、お部屋の予約もちゃんと取ってくださっていて、私たちが行くとテーブルを拭きに来てくださるんです。「拭くから」と言っても「いいんです」とおっしゃって、だから申し訳なくて「モップと雑巾を用意してくださっていたら、自分たちでするから」と、お願いしているところです。そんなこともあって、気持ちよくお部屋を使わせていただいているということですね。</p>
<p>上村さん</p>	<p>はい、ありがとうございます。まさに「なぎさ」ができているところだから、いい場が作れているのかな、と思います。泉さんも、当事者の方に、ご自身が支えられていること、助けてもらっていることとか、いっぱいあるのかな、と思うんですが、よかったらご紹介ください。</p>
<p>泉さん</p>	<p>そうですね、僕が「支えられている」と特に感じるのは、やはり「当事者」というか、同じような境遇にあったような人が多いです。いわゆる「支援者」と言われる人は、すごい知識と技術を持っておられる方たちで、生業として支援者をしている人ですから、もう「プロ」です。でも、矛盾しているかもしれないのですが、「支える」なんてことをあまり考えずに関わってくれている人たちから「支えられているな」と思うことがよくあります。ただ、それにも条件はあります。まず「関心」を持ってくれている人、知識や技術が無くても「もっと知りたい」と言ってくれている方、そういった方のほうが、つながっていて嬉しいな…と思います。</p>
<p>上村さん</p>	<p>はい、ありがとうございます。ひきこもりの当事者の全国集会でご紹介いただいた方で、泉さんと出会ってから、これまでの経験のことを話された方がいました。私はそれを聞いて「助けてあげたい」とか「つらい話を聞きちゃってごめんね」というふうに言ったんですね。そしたら、泉さんに「違うんだ」と。「僕は、あの話を“面白い”というふうにとらえて聞くことが出来てよかった、そういう立場でとらえられて良かった」と言われたのです。その時すごく私はもやもやとしていたのですが、発表したご本人に話を聞いたら、彼も「泉くん“面白い”と言われたから、今の僕があるんです」と言ってくれて「ああ、そこが当事者、元当事者の視点なんだな」ということに、気付かされました。</p> <p>私は何かこう、助けてあげなくちゃならない存在ということで、ひきこもりの</p>



	<p>方々を見ていた、当事者の方々を見ていたということに反省をして、私も、その方たちに助けられているんだ…という視点が欠けていたな、と思いながら、泉さんたちの活動に関わらせていただいていた。</p> <p>濱崎さんは、今も日常的に色々な人に支えられて、助けられている、ということなんですけれども、今後に向けて、この「つながり」そして「なごさ」「あたたかいまち」をつくっていくことに向けて、新たに支えるというか、新しいつながりをつくるために、これからやっていきたいということ、ご紹介いただきたいと思えます。</p>
濱崎さん	<p>はい。今までのお話を聞いていて「お帰り」という言葉、とてもいい言葉だな、と思ったんですね。千里ニュータウンは、全く老人のコミュニティになってしまったということなんですけれども、今、新たにマンションができてきて、若い夫婦が入ってきて、その子どもたちが幼稚園に入ったり、小学校に入ったりしてきてるんですけれども、これをそのまま放っておくと、またどこか進学とか就職とかで出て行ってしまうのは明らかなんですね。これをどうやって止めるか、ということなんです、一つは私が頭の中で考えていることなんです、子どもたちに「思い出」を作ってあげたいな…というふうに思っているわけです。子どもたちが成長した後、何かあった時に関西に帰ってきて、豊中や千里を思い出してもらって、我々が「お帰り」と言えるような、そういう関係ができれば、ものすごくいいな…というふうに思っています。</p> <p>具体的な話で言いますと今、市民実行委員会事業で「ビブリオバトル」という読書会をやっています。図書という一つの媒体で、高齢者から中学生あるいは小学生まで、同じ場で話し合いができるという催しです。今、実行委員会で親子広場であるとか談話室とか、色々な催しに関わっていますが、全体でみると多世代を対象にしているんですが、それぞれの催しでいうと多世代での交流はできていないんですね。年寄りや年寄りだけの集まり、親子広場は親子だけの交流となっていて、その場で多世代での交流にはなっていない、というのが現状です。</p> <p>ところが、ビブリオバトルの場合は、図書という一つの媒体を通じて、年寄りも子どもも「同じ場」で交流ができる、ということなんです。しかも「ビブリオバトル」というところで図書の紹介をすると、中学生あたりにしてみると、公民館のこういう場で、先生以外の大人と対話しながらそこで発表するというのは、その子にとってはとても貴重な体験となるわけで、いわば「他流試合」みたいなものができるのかな、と思えます。そういった「他流試合」に勇気をもってチャレンジしたということは、その子にとって必ずいい思い出になっているはずで、そういったことを大切にしたいな、と思えます。</p>
上村さん	<p>はい、ありがとうございます。残り時間も少なくなってきましたが、泉さんの方から今後に向けて、こんな取り組みをしていきたい、また「つながりがしんどくなる」というお話もありましたけど、そういったことも含めて今後のことをお</p>

	<p>話しいただいてもいいですか？今「多世代でつながっていくこと」ということについて、濱崎さんからご提案もありましたが、いかがでしょうか。</p>
濱崎さん	<p>先ほどの話で言い忘れたことがありました。今度の3月25日開催のビブリアバトルに中学生が3人、来てくれることになっており、そういった形でコラボでの多世代交流が前に進みつつある…ということです。途中からの補足で、すみません。</p>
上村さん	<p>はい、ありがとうございます。さて、いろんな世代の人と交わっていくということ、多世代で交流するということについて、いかがでしょうか。</p>
泉さん	<p>はい、いろんな世代の人と交流することって、とてもいいことだと思います。なぜかという、いろんな痛みがあるんだな、ということを知れるからだと思うんですよ。この間の全国集会を振り返っての反省ということで思っているのが、ひきこもりがしんどい、不登校がしんどい、だから何とかしてくれ…これでは、通らないんですよ。</p> <p>皆一人一人、絶対しんどいことがあるんですよ。絶対しんどいことがある中で、ひきこもりだけしんどいから何とかして、と言っても、それは無理なんです。それで、他の「一人ひとりのしんどさ」っていうのを知っていく…「ああ、あなたもしんどいんだね」ということを知れるっていうのが、多様な世代で交流することのいいところかな、と思います。</p> <p>「ひきこもり」って、共通の知人が必ずいるような「狭い業界」なんです。「ひきこもり業界」って何やねん…という話なんです、(会場一同笑)「あ、あの人、知り合い！知ってる、知ってる！」というような、そんな狭い世界にいたら、あまりよくないな、と思います。「共感できる環境」って、とても大事なんですけど「知らない痛みを沢山知っていく」ということが、とても大切なことだな、と思います。</p>
上村さん	<p>はい、ありがとうございます。皆それぞれが、いろんな意味での「マイノリティ」と言いますか、それぞれがしんどさを抱えている中で、特にひきこもりだけを特別視されることもないし…という中で「境界を越えていく」ということが、一つのキーポイントかな、と思います。では、長谷川さんの方から今後に向けて、コメントをお願いします。</p>
長谷川さん	<p>今後に向けて、ということなんですが、栄えるカフェで「居酒屋」をやった時のことです。居酒屋と言っても、1階のコンビニのお店で、自分の好きなものを買ってきて一緒に飲んで、食べてるだけなんです。この居酒屋をやる前に8年間、30種類くらいのを手作りで持ち寄って、ビール1本くらいをつけて千円の居酒屋をやっていた経験があったんですね。それに来ていた人が、このコンビニの居酒屋にも参加されたんです。そして、その時に彼が「しみつたれた居酒屋してんなあ、あんなもんしたって、人来えへんで」というコメントを、フェイスブックを通じて私に送ってきたんですよ。そこで私が「貴重な意見をありがと</p>

	<p>う。あなたにとっては“しみつたれた、誰も来ないような居酒屋や”と思ったんやね。あなたが“しみつたれた”と思ってるんだったら、“しみつたれていない”居場所を作ればどうですか？」というコメントを返したんです。</p> <p>実は「居場所」とか「つながる場所」って、先ほどの話にもあったように「多様性」があっていい、と思うんです。自分に合った居場所を、皆さんがいろんなところで作っていくのが「つながる場所」になっていくので、皆さんが「居心地がいい場所」を小さくてもいいから、地域でいっぱい作っていくのがいいんじゃないかな、と思っています。私は今度、栄えるカフェに“商店のおじさん”が来てくださるので、商店の方がご自分のお店の商品を紹介してくださるような企画を、地域の商店の皆さんと一緒に作っていきな…と思っています。</p>
上村さん	<p>はい、ありがとうございます。地域にそれぞれが小さな居場所を作っていいたら、そこに皆さんが行くことができる、まさに「網目」のようにつながっていくんじゃないか…というお話ですよ。そういった場を提供してくださるのが、法人でもあるかもしれないし、事業者さんであるかもしれない。</p> <p>実は、千里にも沢山の事業者さんがおられ、色々なお店があっても、なかなかうまく地域とつながれていない、つながっていない…というところもあるんじゃないかな、ということで、今日ファミリーマートさんの事例をご紹介いただきました。清水さんとして、今後こういった「つながりの場」づくりをどうしていきたいか、ということについて教えてください。</p>
清水さん	<p>はい。僕は、特殊なタイプかな…と思うんですけども、やはり「商売」なので、そこで「お代」がちゃんとあるの？というところで、見えないんですよ。たとえばお店の上で居酒屋をしても本当にそれが我々の売り上げになっているのかわからない、だから、やらない、面倒くさい…と思われるお店が多いのかもしれない。</p> <p>でも、お店って、単にモノを売っているだけではなくて、そこで人がつながっていくような場であれば、とても素敵だな…とずっと思ってきたので、この長谷川さんの大きな力をお借りして、我々はその地域の皆さんの思いを受けて、もっともっと変化して、もっともっと地域の皆さんに使ってもらえるお店になれば、それが一番かな…と思って、やっついこうと思っています。</p>
上村さん	<p>はい、ありがとうございました。それぞれ素敵な人が関わって、いろんな場があったり、見えない場もあるのかな…という形に、受け止めさせていただきました。ここで会場から、ご質問があればお受けしたいと思います。今までのお話、新崎先生へのご質問等、今ここで聞いておきたいな…という方があれば、お受けしたいと思います。いかがでしょうか、もう十分、お隣の方とお話しできたということで、大丈夫でしょうか？また、このフォーラム終了後にも別室で少し、お話ができる時間も取ってくださっているようですので、皆さんの前で聞くのはち</p>

	<p>よっと気がひけるけど…という方は、先生やパネリストの皆さんをつかまえて「ちょっと、ここどうなってるの？」等、お聞きいただければと思います。それでは濱崎さん、今後に向けたコメントをお願いします。</p>
<p>濱崎さん</p>	<p>はい。私、ちょっとしたフレーズを考えて流行らせたいな…という悪い癖があるんですが「幸せ寿命を延ばそう、健康寿命なんか延びても仕方ない」ということがあります。先ほどもそういう話をさせていただいて、とても嬉しかったのですが、老人ホームやサービス付高齢者住宅でボランティアをしたい、という主婦の方も結構多いんですね。そんな方が施設へボランティアに行ったときに、利用者さんが喜んで、施設の職員が喜んで、自分も喜ぶという「JOY JOY JOY」という、そういうことを分かっていたらいいのかな、と思います。</p> <p>よくビジネスの世界で取引をする時に「WIN WIN」の関係でないと長続きしない、という話がありますが、それと同じように、ボランティアをやる時に「JOY JOY JOY」の関係がないと上手く長続きしない、ということを目指していきたくて、(会場一同笑)是非これから皆さんにもご一緒に広めていただきたいと思います。</p> <div data-bbox="363 831 975 1290" data-label="Image"> </div>
<p>上村さん</p>	<p>はい、ありがとうございます。本当に「JOY」つまり「楽しく」という視点を忘れたくないですね。無理してしまうと、どうしても自分が楽しくなくなってしまうと、そこは相手に「しんどさ」として伝わってしまいますものね。そこは自分自身で色々なことを制御しながら、本当に「JOY JOY JOY」に向かって是非、すすめていただきたい。皆さんも地域に帰られて、このメッセージを流行らせていただきたいと思います。それでは皆さん、大変お待たせしました。最後に新崎先生の方から全体のまとめということで、各パネリストの皆さんと会場の皆さんのご意見も含めて、総括のコメントをいただきますよう、宜しくお願いいたします。</p>
<p>新崎先生</p>	<p>はい。私にとって、実はとてもつらい時間でした。「喋りの新崎」が、とても耐えて(会場一同笑)色々言いたかったのですが、ずっと我慢して黙っていたのが、大変しんどかったです。でも、私にとってこのパネルディスカッションはとても楽しくて、本当に色々なことを教えていただいた時間でした。</p> <p>泉さんのお話の中で「専門職は、すごい知識と技術を持っている」というコメ</p>



ントがありましたよね。私は、障害者の施設でずっとソーシャルワーカーをしていました。生まれたばかりの赤ちゃんが生後数か月くらいの時に「将来、運動発達の恐れがあります。障害児です」とお医者さんから言われたような、お父さん、お母さんしか、施設には来られません。そんな落ち込んだお父さん、お母さんに最初、私は一生懸命「こんな制度ありますよ」「こんな訓練ありますよ」と応援していましたが、その時はショックで気が動転されていてお力になれませんでした。そんなときに本当に力になってくださったのは、同じ障害児を育てた経験のある、お父さん、お母さんたちでした。「私もこの子が障害があるとわかったとき、死にたいって思ったことあるよ」…そんな一言が、本当に力になってくれたんやなあと思いました。私が「地域住民の力を信じたい」と思ったのは、そんなお父さん、お母さんが居てくれはったからです。そんなことを思い出させてくれたのが、泉さんの当事者の力のお話でした。

清水さんのお話の中では「場の力」ということを、教えていただきました。本当に、一人ひとりが頑張って教えたり、教えられたり、助けたり、助けられたり…ということも大事だけど、いろんな人が集まってきて、ホッとできたり、笑ったり、怒ったり、泣いたり、ちょっと関心を持ったり…そんな「場」を提供するということは、とても大事だなと思いました。今、全国で「子ども食堂」とか「学習支援」ということが話題になっていますが、学習支援をするとか、子ども食堂を作るとかいうことだけが目的ではなく、そういうことを通して「ホッとできる場所」、つまり「ここやったら、安心して居ていいんや」ということを、高齢者の方とか障害者の方とか、子どもたちが思える「場」って大きいな…そんな場づくりをされているのが清水さんだな…と思って、お話を聞かせていただきました。

長谷川さんのお話では、前半でもお伝えしましたが「究極の助けられ上手」やな、と思いました。皆さん4人ともそうなんですけど、つまり「助けられ上手」というのは「できることいっぱいあるけど、できへんことを知ってはる人」ということなんですよね。だから多くの人は「ここだけ助けて」って言われると「何とかせなあかん、ほっとかれへん」と思って、関わった皆さんが元気になれるのかな…と思います。私の大好きな言葉に「人は、必要とされることを必要とする」ということがあります。私は、「必要じゃない人なんておれへん」、と思うんですよ。誰かに必要とされたと感じておられるから、濱崎さんがあんなにお元気なんですよね。(会場一同笑)そして、先ほどフロアからコメントしてくださった紫のお召し物のご婦人、飯田さんもお元気なんですよね。つまり、自分がいろんな形で他者と関わって、必要とされているということを実感されていたら、いくつになってもお元気やな、と思います。

濱崎さん、「頑固じじい」です。(会場一同笑)でも「頑固じじい」というのは、自分自身が確固とした価値観を持っておられるんですね。その価値観が「楽しい

いとあかんやろ！」ということ。ずっと言い続けておられます。私、ずっとコメントを考えていて「WIN WINの関係作りです」って言おうと思っていたんですが、それ以上のことを濱崎さんが言われました。濱崎さんに「JOY JOY JOY」と言っていて、本当にそうやなあ…と思いました。

そして上村さん、悔しいけど、かないませんね。私も、コーディネーターを担当することがあるんですけど、とてもかないません。上村さんのコーディネーターって、一人一人を大切に、それぞれに話してほしいところを上手くつなげておられるな…と思います。私は、コーディネーターという存在は「出会いの演出家」だと思っています。「出会いの演出家」とは、どの人とどの人を出会わせたら元気になれるか、ということを考えている人で、濱崎さんなんかも、そういう方です。「何もやってません、汗かいてません」と言いながら、そういうことを常に考えて動いておられる濱崎さんは、まさに「天然のコーディネーター」つまり「ナチュラルコーディネーター」です。(会場一同笑) そうやって、つないだことが嬉しい、そういう方って、とても大事な…と私は思っているんです。

それで最後に、私は「お節介のすすめ」ということをお伝えしたいと思います。今、学生や若い人に「お節介ってどういうこと？」と聞くと、ほぼ100%「悪いこと」という答えが返ってきます。「なんで？」と聞くと、「他人のプライバシーに、ずけずけと土足で踏み込んでくる人のことでしょうか？」と言わ



れるんです。そこで一応、大学の教員として「お節介」の語源を調べて分析してみたので、お手元の資料にその調査結果を残しています。資料の中の「お節介のすすめ」というところを、見ていただきたいと思います。「お節介」とは、「節度」のある「介(なかだち)」ということだそうです。つまり、今日出られた皆さんのことなんです。「介(なかだち)」とは、つらい話で申し訳ありませんが、江戸時代に切腹をする時に介錯人<sup>かしのく</sup>という存在があって、語源はそこに由来しています。お腹を刀で刺しただけでは実際に死ねないというところを、その死にきれないという苦しさをできるだけ早く終わらせてあげる存在ということで当時「介(なかだち)」ということがありました。

何が言いたいかというと、ボランティアもそうだし、お節介さんって、他人のプライバシーにずけずけと土足で踏み込んでくるというのは、「行き過ぎた」お節介なんですね。「本当のお節介」というのは、資料にもありますが「目配り・気配

り・心配り」ができて、「他人の困りごとを放っておけない人」のことなんです。濱崎さんなんか、まさにそうですよ。一人でここに来て、資料を読んでおられた方に声かけはるんですよ。その「お節介」でつながって、こうして今日この場に来てくれはる人がいてはったり…ということがあるんです。だから私は「いい意味でのお節介さん」をどれだけつくれるか…ということで、私も今やってるんですよ、濱崎さん。「お節介推進委員会」！（会場一同笑）地域で「もう会費も何もいらぬです、地域で進めてください！自分で支部長作ってください！」と言ってるんですが、残念ながらあまり広がらないんですね。やっぱり「JOY JOY JOY」の方がいいように思います…ということで、このあたりで終わっておこうかと思ひます。皆さん、今日は本当に楽しい時間を、ありがとうございました。では、マイクをバトンタッチしたいと思ひます。（会場一同拍手）

上村さん

はい。新崎先生、ありがとうございました。皆さんお一人お一人のお話のポイントをしっかりコメントに入れていただきまして、ありがとうございました。非常に短い時間でしたが、皆さん、本当に的を絞って色々な活動のお話、そこから得られた大切なことを伝えてくださったんじゃないかなと思ひます。

皆さん、今日は沢山の学びを「分かる」（手話実演）…手話のお話のところでもありましたが、心から中に入っていく、腑に落ちるということ、ご体験いただけましたでしょうか。また今、自分の中に腑に落ちなくても、これから皆さんが地域で活動する中で「あの時、あのパネリストの方が言われた言葉、新崎先生の言葉が、これだったんだな」と、思われる瞬間が出てくるんじゃないかな…と思ひます。今日の学びを是非、これからの活動であつたり、生き方の中で実践して「JOY JOY JOY」の人生を、お互いに送っていきましょう。



パネリストの皆さん、新崎先生に大きな拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

（会場一同拍手）

では、マイクを司会の方にお返しいたします。

司会

皆様、本当にありがとうございました。本日のフォーラムはいかがでしたでしょうか。今後の事業企画の参考とするため、お手数ですが、お手元のアンケートへのご協力をお願いいたします。最後に千里図書館からのお知らせがございます。本日のパネラーの皆様方からご紹介いただきました本や、本日のフォーラムのテーマに沿った本を会場後方に展示しております。貸し出しを希望される方は、そ

の本をコラボ館内4階の図書館へお持ちいただきますよう、お願いいたします。

このあと引き続き、新崎先生、パネリストの皆様を囲んでのフリートーク交流会を、別室の第4講座室にて、17時頃までの開催を予定しております。まだまだ話し足りない方など、交流会に参加を希望される方は、フォーラム終了後にこの会場にそのままお残りいただき、後ほどお部屋の方にご案内させていただきます。以上をもちまして「第12回 千里文化センターフォーラム 支え合いの未来を紡ぐ～共に歩む あたたかいまち千里～」を終了させていただきます。本日はご参加いただき、本当にありがとうございました。

